

横浜市退職小学校長会



第72号

令和6年3月7日
横浜市退職小学校長会
会長 加納 多嘉美

ホームページアドレス



創作 主体性は唄う

会長 加納 多嘉美

「とにかく医者に行こう」
全身の熱っぽさをこらえながら
次郎はアパートの鉄の階段を降
りた。コンコンと金属製の音が、
頭の中に響き、全くたまらない。
枯葉の吹き抜ける朝の小公園
前まで来た時に、突然、激しく
せき込む声が聞こえた。喘息だっ
たおじいさんを思い出し、慌て
て振り向くと、青いコートの娘
さんが、しゃがみ込み、苦しん
でいる。

「背中をさすってやろう」と
近づき「ああ、俺も風邪だった」
と気付いた時、喉奥から腹の底
までに広がるむずむずが爆発。
車止めの杭につかまり連続の咳。
涙も鼻水も一緒、遂に公園の溝
に吐いてしまった。
ポケットには学割定期入れだ
け。「ああ」と目をつむり嘆
息しかできなかった。
「どうぞ」と柔らかな声が聞

こえ、振り向くと手にハンカチ
が握らされていた。すぐに顔に
あて、息を吸い込み思い切り鼻
をかんだ。「あつ」と、女性の
声。振り向くとすらりとした体
に未だ幼さの残る顔、大きく見
開いた目。
「すみません。病院に行こうと
思ってたのです。きれいなハン
カチ汚してしまって。弁償しま
す」
「いえ、どうぞお気遣いなく」
次郎は恐縮したが、心が明るく
膨らむのを意識した。
並んで歩きながら話しかけて
みる。「学生さんですよね」「は
い。Y大学学芸学部です」「同
じ。工学部機械科、スト中の大
学に入学したのも一緒だ」「ス
トではありません。封鎖です」
「ストも封鎖も同じですよ」「違
います。私たちが主体的に考え、
学生個々の総合意志が学校封鎖

です。社会一般のストとは本質
が違います」目を合わせずに彼
女はなおも続けた。
「主体性や学問の世界を抹殺
する体制への反発、問いかけが
封鎖です」次郎は初めてカチン
ときた。
「本質の違いは確かにある。僕
らの運動にはリアリティが無い。
自ら主体性を持って認識したか
な。主体の根源は肉体だ。想性
は肉体に属する。風邪なのに闘
争大会だけの学校に行く貴女は
主体的なの？日常の中で主体性
が無いなら観念の遊びじゃない
か」
気が付くと「西山医院」と金
文字のドアまで来ていた。彼女
が初めて次郎を見た。「失礼し
ます。・私も明日、この病院
に来てみます。11時に」「明日、
11時に？もちろん僕も来ます。
また話したい」勢いよく次郎は
ドアを押し、気が付くと調子外
れな声で唄っていた。すりアリ
ティと主体性！
未だ残り香のあるハンカチをポ
ケットの中で握りながら。完

シャッターチャンス

石川 一秀

「ケーン・ケーン」来園者が
出口へ向かう閉園間近の箱根湿
生花園に鳴き声が響いた。聞き
覚えのあるキジの声だ。その声
を頼りに園の奥へと小走りに戻っ
た。

林の茂みの中に鳴き声の主、
国鳥を発見。輝いた目、鮮やか
かで美しい羽、しなやかな長い
尾、に目を見張った。
はやる気持ちを押さえ、シャッ
ターを連射。閉園間際の快心の
シャッターチャンスとなっ
た。

一枚の写真

小坂 映夫

床の間の横、鎌倉彫の額に
一枚の写真がある。弟が生まれ
たばかりの昭和十八年の写真で
ある。父母、姉、私、弟の五人
が写っている。母も姉も私もよ
そゆきのものを着ている。父は
兵隊服に坊主頭。

そう、出征するのだ。三歳の
私は父の膝に手を置いているが、
その感触は記憶にない。
父は帰らなかつた。私は父の
二倍半の歳になった。

秋深し父の学びし平家読む

自分を偽らず

月田 和子

「裏を見せ表を見せて散る紅葉」
——良寛様辞世の句——
残りの人生、私も本音を大切
に、常に自然体で素のままの自
分を曝し、真摯に生きたいと願
うようになった。長所より短所
の勝る私、そんな私を丸ごと受
け入れ、温かく支えてくださる
先輩後輩、友人たちに恵まれて
いる。その関わりの中で、生き
がい、楽しみ等を見つけ、満た
された日々を送っている。私
は果報者である。

雲

矢島 紀子

「坂の上の白い雲」を見
たい。果たして 見えるの
か。病を得て七年。朝散歩。円
海山に向け 坂を登る。見え
た。枯れ木立を通して雲があ
る。白い。朝日に光ってい
る。躍動感 輝く若さ 憧れ
向上心……連想するものはある
が 現在進行形ではなく 遠い
ものを感じた。坂途中の 淡黄
色のろう梅の香、満開の山茶花
の紅、風に舞う山桜花等 季節
毎 日々の小さな発見を 楽し
んでいる。

